



# グローバルイズムと ナショナルイズム



ヤマダヒフミ

言うまでもなく、この世界はグローバル的に広がってきている。それは当然、船舶の運行、飛行機の往来から始まり、そしてインターネットによって最終的に補完しようとしているように思う。私が、例えば好きな日本のアーティスト、あるいは海外の好きなアーティストの動画をYOUTUBEで見るとする。すると、そこにはもう既に、様々な国からのコメントが、それぞれの言語を使って寄せられている。これはもはや、小さな共同空間とでも呼ぶべき場所であろう。これは、好きなアーティストを目当てに、世界中から、あらゆる空間を超越して、同種のを愛好する人々が一カ所に集っている、おそらく歴史的に見ても最も新しい空間なのだ。(こういう考えは、ベネディクト・アンダーソンから得た。興味のある人は一度読んでみる事をお勧めする。)

さて、我々の社会はこうしたグローバル的に広がってきているにも関わらず、それに反して、ナショナリズムもまた、過去から再び持ち上がってきて勃興してきている。しかもそれはインターネットという最も新しいメディアを通じて、持ち上がってきている。・・・これはどうした事だろうか?・・・どう考えても、インターネットは広がりを持った最も新しい開放的な空間のはずなのに、丁度、それに反する極端に閉鎖的なコミュニティが次々と生まれつつある。私はこの事を次のように考えている。

おそらくナショナリズムというのは、個人にとってのアイデンティティのようなものだ。そしてこれはグローバリズムによって、一種の危機にさらされる。

おそらく、幕末から明治維新に至る日本の歴史などは正にそうした歴史だったように思う。尊皇攘夷、というのは、概念としては古くさいかもしれないが、彼らのした事は非常に新しかった。そして、この二つは何も矛盾した事ではない。・・・彼らはおそらく、外国が本格的に脅威なるにつれ、初めて日本人としての自分達のアイデンティティを自覚せざるを得ない羽目になった。

ナショナリストというのは、人種や民族というものを恒久的に考えがちだが、実際、外側の脅威や、自分達とは異質な人々の存在なしには、自分達の民族に対して自覚的に考える機会はない。水の中の水は自らを自覚しない。自身が水である事を自覚するのは、その外側に出る一瞬をはじめて持つ時なのである。

逆に考えると、ナショナリズムというのはおそらく、他国、異質な人々との文化的交流における一種の拒否反応として考える事ができるだろう。そしておそらくグローバリズムとは、異質な人々との同化、均質化作用として考える事ができる。

ナショナリズムというものは、積極的にとらえるなら、その集団における異質なものと出会った時にもたらされる一種の自己認識である。この著しい例を上げれば、特に、柳田国男や折口信夫に見られる。彼らは西欧の本格的知性をくぐってきたが故に、自分達の内部に存在する「日本人」というものへの深い問題意識を持ち、それらを探っていったのである。彼らがただ日本的、日本的であったと考えるのは間違っている。

集団の自己認識としてのナショナリズムは悪ではない。異質な他者は、また自分達の事を深く考えさせる契機となるからである。だが、その反発から、他者を排除するのであれば、それは間違いだろう。他者も、また我々と違った集団的アイデンティティを持っているからである。

またグローバリズムというのも、単なる同化作用として考えるのであれば、それは間違っている。我々は均質な人間に溶けていく必要性はない。我々は、このグローバルの世界にあって、各自、よりそれぞれの文化的アイデンティティを探り直し、自己に対する問いを発する事によってはじめて、異質な他者と対等に向き合う事が可能になるからである。

おそらく、現代のインターネット世界の広がりや過去の黒船到来のようなインパクトが、我々にとっては存在するだろう。我々は、自室にいながらにして、瞬時に世界と繋がる事が可能になった。テクノロジーによる環境の変化は、我々に様々な可能性を促進させる。だが、それを「どう考えるか?」というのは個人の問題として残されたままである。過剰な進歩主義者が考えるように、我々の内、貧困や老いや、そして死すらもが例え克服されたとしても、それで問題は終わりではない。開かれた社会になればなるほど、我々は次の問いを掲げざるを得ないのである。「私とは何か?」「私達とは一体、誰か?」